

第104回 「低音の魅力」バーブ佐竹の ハワイアンな美声

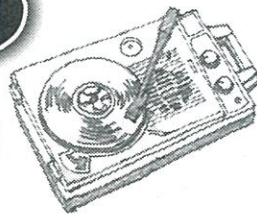
ハワイの渚は今頃、日本から訪れた観光客や芸能人たちで賑わっていることでしょう。戦後世代にとって2回目となる「東京オリンピック」開催の年が、いよいよ明けましたね。前回の五輪開催は56年前の昭和39年、この年の歌謡界は『東京五輪音頭』をはじめ『東京ブルース』『ウナ・セラ・ディ東京』『東京の灯よいつまでも』など、五輪や東京をテーマにした歌が何曲かヒットしています。こうした中、五輪開催の2か月前に発売され、あつという間に日本中を席卷したのは、五輪ブームとは無縁の『お座敷小唄』（歌・和田弘とマヒナスターズと松尾和子）で、当時としては戦後最多となる250万枚の大ヒットを記録。

この年、五輪直前に東京モノレールや東海道新幹線が開通し、手塚治虫の漫画に描かれていたような未来都市への開幕きを感じていたときに、古風な「小唄」が流行するとは意外な感もありますが、軽快なドロンパのリズムに乗せて歌われる「覚えや

すくて短いメロディー」は、五輪ムードと経済成長に沸く企業や会合の宴会にはぴったりのだったのかもしれない。

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで



堀井六郎
絵・松本

ません。

五輪閉幕後の12月にはバーブ佐竹のデビュー曲『女心の唄』が発売、『お座敷小唄』同様、東京や五輪とは無関係の楽曲は、『お座敷小唄』のあとに続く年度代表曲のような存在感がありません。

寒地・釧路生まれのバーブですが、マヒナ同様、ハワイアンバンド出身でした。日系2世だったバッキ―白片の影響もあってか、ハワイアン出身者にはポストかエセルといったハワイの名を芸名にする人がいます。

30年ほど前、私がバーブ佐竹の事務所に電話を入れ、電話に出た人に「バーブ」という名前の由来を尋ねたことがあります。さとうような声で「バーブは初めからバーブなんだよ」と答えにならないような回答を聞いたことがあります。

声の主は、電話に出た瞬間からバーブ本人だということわかった。それ以上は訊かずに受話器を置きました。

本名の「佐武」を「佐竹」に直し、竹を意味



する英語のバンブーからバーブとなったようですが、憧れだった夢のハワイの名曲『小さな竹の橋でも影響しているかもしれません。

GSのザ・ゴールデン・カップスでドラムを担当していたマモル・マヌーのマヌーは、ハワイ出身の叔父の姓から名づけられたものでした。

『サンゴ礁の娘』をカバーしている尾崎紀世彦も、実はハワイアンバンドからスタートしています。8年前に尾崎が亡くなった際に開かれた「お別れの会」には、女性ハワイアンの南かおる（芸名からも南洋の香りが漂ってきます）が出席していました。

ウクレレ漫談の牧伸二が「低音の魅力」と称していたバーブの声ですが、南かおるとバーブが二人で吹き込んだ昭和41年発売のLP『ハワイアン 100万ドルのデュエット』に収録されている『珊瑚礁の彼方に』で、バーブの美しい裏声が堪能できます。

ハワイの正月とは無縁の私は毎年、松の内にハワイアンを流して南国気分になることにしています。